



ICT 海外ボランティア会会報 第 102 号

2022 年 3 月 1 日（火）

URL: <https://ictov.jimdo.com>

EML: info.ictov@network.email.ne.jp

目次

◆ 特別寄稿

[NTT 東日本の国際室活動](#)

[NTT 東日本](#) [国際室長](#)
[長江 靖行](#)
当会顧問

◆ 特別寄稿

[岩槻日記\(18\)](#)

[当会特別顧問](#) [石井 孝](#)

◆ 海外グラフィティ

[富は海からやって来る](#)

[日本ベンダーネット社長](#) [エッセイスト](#) [田上 智](#)

◆ 海外便り

[スペインバスク地方・フランス南西部俳柳紀行\(2\)](#)

[元 JICA シニア海外ボランティア](#) [北垣 勝之](#)

◆ 第 12 回 ICT 海外情報ウェブ講演会(サロン)模様

[事務局](#)

NTT東日本の国際室活動

当会顧問
NTT 東日本 国際室長
長江 靖行

NTT 東日本 国際室の長江靖行です。この度は ICT 海外ボランティア会に寄稿する機会を頂き、誠にありがとうございます。本稿では NTT 東日本の国際活動の主な取り組みを紹介させていただきます。



◆はじめに

NTT 東日本は、事業構造がデジタル化・グローバル化の加速により劇的に変化する中、これまで利益成長を支えてきた基盤事業を DX 等により生産性を高める取り組みを加速させつつ、地域活性化に貢献する新たな事業領域・業務分野へチャレンジし、非回線・非通信を含めた地域課題解決ソリューションの提供に取り組むことで、NTT グループ全体の持続的な成長・発展に貢献しております。

国際分野においては、1社時代から築きあげた、「海外通信キャリアや政府機関との長年のリレーション」と「地域に貢献するという DNA」をベースに、現地国パートナーと共に地域密着の課題解決を通じて共存共栄を実現する事業展開に取り組んでいます。

これまで、国内の地域通信事業で培った豊富なノウハウと優れた技術を活用し、開発途上国における電話網構築プロジェクトやネットワーク品質の向上、人材の育成、光アクセスの展開支援などに貢献してきました。

2020年6月には、ベトナムで長年培ってきたノウハウやビジネスモデルを東南アジアの国々へ展開するために、NTT イーアジアを発足（NTT ベトナムからの社名変更）しました。現在は、NTT イーアジアと連携し、ベトナムを中心に更なる国際事業の推進に取り組んでいます。

◆ベトナムでの活動

NTT ベトナム（現 NTT イーアジア）がベトナム国営通信会社（VNPT）と締結した事業協力契約に基づき、ハノイ市北部での約 24 万回線の電話回線の建設および事業運営指導を 1997 年より実施してきました。その後 2016 年 1 月には、NTT ベトナムと VNPT グループ傘下の VMG 社との間で、ベトナムでの付加価値サービスの展開を目的に合弁会社（OCG）を設立しました。また 2018 年 1 月より、現地小学校での日本型 ICT 教育ソリューション導入に向けたトライアルを実施し、その後 VNPT で商用開始しました。

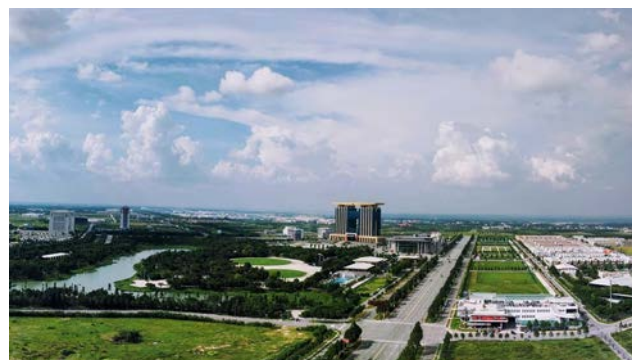
現在は主に、ベトナム南部ビンズオン省のスマートシティ化の実現（①）と定型業務（BPO）やソフトウェア製造（開発）をベトナムで受入れるオフショア開発（②）に取り組んでいます。

①【ビンズオン省のスマートシティ化の実現】

ビンズオン省の公営デベロッパー BECAMEX 社の子会社である VNTT 社との間で、同省のスマートシティ化の早期実現に向けた事業協力契約を締結し、ICT インフラ整備事業を実施しています。NTT イーアジア社員が現地に駐在し、VNTT と一体となって、高

品質な光回線サービスの提供や加入者の獲得に取り組んでいます。光回線の設備構築/開通工事/運用保守やマネージド Wi-Fi 提供に関する技術指導、営業力強化に向けたアドバイス等の現地活動に加えて、日本での設備点検や改修等に関する研修等を通じて、NTT 東日本の経験やノウハウの移転を行っています。

今後は、ICT インフラのみならず、VNNT 社を通じた NTT 東日本やグループ会社などの強みを生かした同省での DX 事業の展開にも取り組んでいきます。



ビンズオン新都市中心部全景



VNNT とのオンライン研修

②【オフショア開発】

長年にわたるベトナムでの事業で得たノウハウを活用し、NTT イーアジアにてオフショア開発に取り組んでいます。NTT イーアジアをベトナムでのソフトウェア製造拠点とし、NTT 東日本およびグループの開発業務や定型業務をアウトソースすることによる、ソフトウェア製造のコストダウンとスピードアップの実現を目指します。また、非通信分野事業への多角化を実現する NTT 東日本グループ会社における、迅速かつ低コストのサービス開発にも貢献していきます。2021 年 12 月には OCG にて人工知能 (AI) 学習のためのアノテーションサービスを開始し、今後も開発体制を充実させながらオフショア事業を推進して参ります。

◆インドネシアでの活動

民間資本活用による中部ジャワ地域電話網増設事業のため、1995 年に現地企業などとの合弁会社 PT MGTI 社を設立しました。PT MGTI 社は、インドネシア PT テレコム社と共同事業運営のための契約を締結し、約 35 万回線の電話網設備建設を完了しました。同国におけるこれまでの実績、人脈を利用して、幹部交流、研修員の受け入れ、光アクセスの展開支援などを通じ、インドネシア PT テレコム社とのパートナーシップを継続してきました。2016 年には光アクセスの開通工事のコンサルティング、2018 年には運用保守のコンサルティングを実施しました。

現在は、コンサルティング活動で提案してきたワークフロー含めた開通工事手法や故障修理手法をインドネシア全国のラインマンセンターに展開する研修を企画・実施しており、今後もインドネシアの光化推進に貢献していきます。



PT テレコムアクセスとのオンラインセミナー

◆ ブータンでの活動

2018年11月より、JICA（独立行政法人国際協力機構）の技術協力プロジェクト、ブータン国「災害対策強化に向けた通信 BCP 策定プロジェクト」を実施してきました。NTT 東日本グループの各組織と連携し、NTT 東日本が培ってきた災害対策の経験とノウハウを活かして、ブータンテレコムに対する BCP 策定・運用の技術移転を実施しました。なお、本プロジェクトは、NTT 東日本とジャパンリーコム社との共同で実施、2022年1月に全行程を完了し、現在はブータンテレコム自身が BCP を運用しています。本プロジェクトは JICA から高い評価を受け、ジャパンリーコムの山口順也さんは JICA 理事長賞を受賞され、弊社のプロジェクトメンバーの峯村貴江は日本 ITU 協会国際協力奨励賞を受賞いたしました。そして 2018年11月～2020年6月迄、東日本大震災を含む災害対策経験等を活かし弊社のプロジェクトマネージャとして本プロジェクトを推進された志鎌昌宏さん（現 株式会社ミライト東北支店）に改めて感謝申し上げます。

また、本活動期間中にブータンテレコム幹部と NTT 東日本幹部との交流が深まり、2020年7月27日、ICT 分野における技術交流・人材交流（ブータンテレコム社員のインターンシップ受入れや NTT 東日本グループ社員の現地派遣含めたベンチマーク活動など）を通じた BT との関係強化と事業の発展を目的とした覚書を締結しました。

（参考：2022年1月31日付け「通信興業新聞」に関連記事記載あり）



ブータンテレコムとの覚書締結オンライン式典



ブータンテレコムのオンライン BCP ドリル実施

◆台湾での活動

台湾中華電信と「NTT 持株と NTT 西日本と NTT 東日本」で、サイバーセキュリティに関する技術交流を行い NTT グループの技術力向上を図っています。

また NTT 東日本では、アクセス系設備の保守運用や災害対策分野に関する技術交流を通じて良好な関係を維持しております。

◆おわりに

このように、NTT 東日本では自社の経験・ノウハウと現地パートナーとのリレーションを活用した様々な国際活動を行っています。今後も、ベトナムでのスマートシティ化やオフショア開発の事業を拡大すると共に、東南アジアを中心に国際活動を推進し、NTT 東日本の事業への貢献と SDGs を意識した社会への貢献の両輪で取り組んでいきます。

岩槻日記(18)

当会特別顧問 石井 孝

「ソフトウェア雑感」(妄想)

現役を退いてから 25 年、現役当時色々とお世話になったソフトウェアに関わる大家の方々とズームで久しぶりに雑談を交わす機会を得た。

大分ボケてしまって、皆さんには甚だ迷惑であったと思うが、私自身は大変勉強になり且つ面白かった。

最近、みずほ銀行など各所で事業運営そのものに関わるソフトウェアシステムのトラブルが社会問題化している。

ソフトウェア工学的に観ると、現行のビジネス用のソフトウェアシステムは、事業運営機能の何もかもを一括してソフトウェア化してしまっているきらいがあるので、極めて膨大な密結合のソフトウェアシステムになって居る。

このため、ビジネス機能の追加や変更のため、何かちょっとしたプログラムシステムに手を加えた時、そこにミスがあると全体に波及してシステムダウンを起こしてしまう。

現在世の中を席卷している、こうした所謂レガシーシステムの行き詰まりを打開しないと 21 世紀に生き残れないと警告しているが、その一つに経産省レポート「2025 の崖」がある。

このレポートの中に色々問題点が指摘されているが、これらをどう解決したらいいかについての具体的施策に関してはあまり明確でない。

コンピューター・システムに完全依存する今日の社会システムに於いて、堅固で且つフレキシブルなソフトウェアシステムに創り直すという、一種のソフトウェアシステムに対するパラダイムシフトは、差し迫った課題なのである。

ここで思い起こすのは、真藤(恒)さんの造船改革(パラダイムシフト)である。私は、造船工学は専門でないので詳しいことは省くが、真藤さんは先ず、船自体の形を抜本的に変え、「真藤船型」なる輸送効率の極めて高い船型を創造した。

そして、その製造に当たっては、製造工程を機能単位としたモジュールをつくり、これらを組立てると言う作業上安全で且つ効率的な方式に改革したのである。

真藤さんは後に NTT の初代社長に就任されたが、NTT 内における商売用のソフトウェアすべてを内製化する新しい組織を創り、其処で、既存のソフトウェアシステムすべてをモジュール化し、これらを組立てる方式に組み直すよう指示された。

所がソフトウェアのみのモジュール化では、造船の場合のハードのモジュール化のような組立方式によるメリットが出ず、巧く行かなかった。

当時と比べると現在、マイクロプロセッサやメモリーの技術は格段に進歩して居る。ソフトウェアの単なるモジュール化でなく、まとまった具体機能を単位にモジュールにして、これをマイクロプロセッサに組み込み(ハードウェア化)、これらを電氣的結合のかたちで全体を構成出来ないものであろうか。

これが出来れば、密結合されたソフトウェアによる大規模システムの問題は解消出来るはずである。

真藤さんがご存命であれば、必ずや、こうしたかたちのモジュール化のご下命があり、ソフトウェアシステムのパラダイムシフトに再チャレンジされたに違いない。

今回の会合は、しばらくぶりに色々物事を考えさせられる楽しい時間であった。



「嬉しいニュース」

今朝一番で、私にとっては「嬉しいニュース」が飛び込んで来た。かつての仕事仲間 M 氏（旧姓）の常務昇進である。

M 氏は高校卒業後、電電公社に入社し、線路マンと言って、電柱を建て、そこに電線を張るような仕事をして居た。

しかし、先々を考えるとコンピューターやソフトウェアと言った関係の仕事をしてみたいと、常々思っていたそうである。

そこへ、民営化を契機に NTT は、ソフトウェアなどに就いてはずぶの素人を集め、ソフトウェア開発をゼロからはじめる組織を創るという話を聞き込み、M 氏は早速、応募したのである。

話が長くなるので、細かいところは省略するが、M 氏達は文字通り昼夜を問わない努力の末、当時としては画期的なデジタル PBX のソフトウェアシステムを完成させたのである。

その後、この組織も私が辞めると、内製によるソフトウェア開発の火は消え、M 氏は、暫く不満を漏らしていたが、遂に意を決し、NTT を辞め大手ソフトハウス数社の中途採用試験に応募した。

さすがに彼の実力を持ってすれば、全ての会社に合格し、各社から手厚い招聘を受けたようであるが、氏はその中の C 社を選んだ。

C 社も色々と平坦な道のりではなかったようであるが、M 氏は T 自動車との仕事に全力投球し、この成果が認められ、還暦を迎えた今日、常務昇進を請われたそうである。

今、還暦と言えは若い、健康に留意し、益々頑張る欲しいものである。おめでとう！

「有難う御座いました」

沢山の皆様から誕生日祝いのメッセージを頂き、厚く御礼申し上げます。

カレンダーをめくり、あと一枚になりますと私の誕生日です。昔は、「来年こそは」、などと思いましたが、近頃は、「もう一年か、速いな」と、何か物寂しい気分になります。

そんな時に、こうした温かいメッセージを頂戴しますと、とても嬉しくなります。

本当に有難う御座いました。

さて、全く偶然ですが、今回の誕生日直前に同年の畏友 M さんから自分史が送られてきました。

M さんの自分史は、在り来たりの思い出話ではなく透徹した人生観で、これを読んでいると、今までぼんやりと迎え来た誕生日でしたが、先の短い年寄りの誕生日というものをつくづく考えさせられてしまいました。

それは、何気なく時々襲ってくる「心のすき間」（無為無聊）の問題です。

若い頃は、毎日仕事に急かされ、先々にもそれなりの希望があり、心の中にすき間のようなものをあまり感じ無かったのですが、この頃はすき間だらけで、ただ漫然と生きているのではないかと反省させられたのです。

すき間を如何うめるか、年寄りの生きがいとは何なのか、これは結構難しい問題です。

富は海からやって来る

日本ベンチャーネット社長 エッセイスト 田上 智



なかにし礼の「石狩挽歌」の二番は、様々なロマンを掻き立てられる。

燃えろ篝火 朝里の浜に 海は銀色 ニシンの色よ
ソーラン節で 頬そめながら わたしゃ大漁の 網を曳く
あれからニシンはどこへ行ったやら オタモイ岬の ニシン御殿も
今じゃさびれて オンボロロ オンボロボロロ

かわらぬものは 古代文字 わたしゃ涙で 娘ざかりの 夢を見る
かつて、「一起こし千両」といわれたニシン漁。栄華の夢を今に残

すのが小樽の「青山別館」であり、贅の限りを尽くした建築である。紫檀、黒檀など南洋材をふんだんに使い、なかでも安南の屏風が目を引き。大正の末の建築だが、その頃、酒田の本間家と交流のあった青山家の当主が、これまた圧倒的な優雅さで群を抜く酒田・本間家の本宅にも引けを取らないものを作ったのだ。酒田の本宅は、幕府の巡検使一行を泊めることを目的に作られたこの邸宅だが、それこそ、到底、庶民のものとはかけ離れたものである。「本間様には及びもせぬが、せめてなりたや殿様に」と謳われたほどの富豪である。石高にして二十六万石、中堅大名と比較しても十分な収入である。日本一の大地主だが、農地の収入のみならず、海運業でも利益を得ていた言わば、総合商社である。酒田は本来、「べにばな」やコメの集散地であるが、河村瑞賢による西廻り航路の恩恵に浴し、西の堺、東の酒田ともいわれていた。日本一の大地主の元となったのは、そもそも、海で稼いだ種銭があたためである。

シェークスピアの「ベニスの商人」の主人公は、金貸しのユダヤ人と貿易商アントーニオの裁判劇であるが、東方貿易で栄えたベニスを舞台としている。アントーニオはマーチャントという役割だが、マーチャントとは単なる「商人」ではなく「貿易商」をさす。

昨今人気の高い、オランダの画家・フェルメールであるが、「天文学者」「地理学者」という著名な二枚の絵がある。これこそが、オランダの黄金時代を映し出した端的な絵画なのだ。今のバタビア（インドネシア）に「オランダ東インド会社」を作り、スペイン、ポルトガルのあとイギリスが出てくるまでの時期、栄華を誇っていた。この元となったのは、胡椒など香料を扱った貿易だった。その国が、富み栄えるのは、まず、貿易であり、次いで植民地支配である。長崎の出島はヨーロッパではオランダのみ貿易を許されたが、出島の商館とは正式にはオランダ東インド会社日本支店である。世界制覇のための遠洋航海には、どうしても「天文学者」と「地理学者」の知識が必要だったのである。

小樽のニシン御殿、酒田の本間家本邸、ベニスの商人のアントーニオ、フェルメールの絵画いずれも「富は海からやって来る」の典型例である。但し負の要素も相当ある。航海は「板子一枚下は地獄」である。初期の大航海時代、海難や壊血病などの疾病で乗組員の生存率はわずかに20%であった。運よく港に船荷と共に着けば、どんな貧民も一挙に富裕層に跳ね上がり、王侯貴族の生活ができる。ニシンも同様で、なかにし礼も実兄が欲を出してニシンを本州までもってきたばかりにすべて腐ってしまい大きな借金を家族が抱え込んだ。酒田は千石船の航海、ベニスもアントーニオの所有船が一時遭難の情報が入る。さように、船は常に危険と共にある。まさにハイリスクハイリターンプロジェクトと言って良い。(2010.2.5完)

スペインバスク地方・フランス南西部俳柳紀行(2)

元 JICA シニアボランティア
北垣 勝之

バカンフォース渡る世のつね街歩き

見知らぬ街を尋ね歩くのは至難である。まず方向性、晴れていれば太陽の位置で方位が読める。地図上は平面でも実地は凸凹、段丘がある。それに街路は曲がっている。現在地が地図の上で確認できない。街並みの家屋が立て込んでいれば探すのが大変だ。ましてやバスク地方のように3種類の言語で併記された町名・番地表記は複雑怪奇である。そんなこんなで行ったり来たり‘back and forth’（行きつ戻りつ）を繰り返す。

ビルバオ旧市街の郷土料理店探しに30分以上もかかってしまった。ここでは英語も西語も通じない。返事は私の分からないバスク語である。狭い路地を幾人もの人に尋ねながら巡る。半ば諦めかけて水ボトルを買おうと立寄ったファミリーショップ、レジを一人で切り盛りする中年女性に英語で訊くも判らない。すると10代と思しき娘を呼び出して彼女に聞いてくれという。言葉が通じる娘はスマホをいじくりながら悪戦苦闘、店の外に出て同様の動作をしていたら「わかりました。この先の道をまっすぐ行って、突き当りを左に数10m行けばありますよ」と笑顔で答えてくれた。当地に住みついた華僑母娘の連携プレーでようやく目的地にたどり着く。賑やかな店内に入ろうとしたら、店員が威勢のいい声で「今、店仕舞いするところだよ。夜8時から再開するから出直して来てね」と言う。欧州や中東の常として午後4時頃までには大半の店は一旦閉店する。先のレストランの店員は「朝から働きづめだ。俺たちにも休憩時間をくれよ」と笑いながら言った。

仕方なく3軒先のピンチョ店に入る。ここは休憩なしで店長が一人夜に備えて仕込み中、声を掛けるのも躊躇したくなるほどの忙しさだ。カウンター越しに白ワインを注文、すでに出来合いのピンチョを二、三勝手に選んで自席に運びチビリチビリと賞味する。店内には数人先客がいたが彼等も気ままに飲み食いを楽しんでいる。隣席で一人静かにビールを飲む青年がいたので声を掛けると23歳の独身男性、地元でエンジニアとして自動車関係の仕事をしている由。エンジニアと言っても詳しい説明がない所を見ると、代理店の修理工辺りではなかろうか。聞けば今日は彼の誕生日だそう。チカ(chica:若い女性)もいないこの哀れな男に我々が代わりに‘Happy Birthday’の乾杯で祝ってあげる。そろそろ潮時のようだ。カウンターに代金を置いて店長に一声かけ店を出る。

ビルバオのビスカヤ橋で肝試し

どんと来い出たところ勝負絶景かな

大西洋ビスケー湾に面するビルバオは、かつて重工業を主体にする港湾都市であった。その頃の名残りを留めるビスカヤ橋を見学に行く。街の中心から地下鉄に乗り、やがて地上に出て15分位ビルバオ川沿いを行くと鉄骨構造のか細い橋梁が見えてくる。これが1893年に開通した運搬用の橋で、エッフェル塔を製作した時の弟子アルベルト・デ・パラシオ(ビルバオ出身)が設計したものである。兩岸の主塔からケーブルで支えられた橋の下を、ゴンドラと称する曳船が橋桁沿いにワイヤーロープで曳航していく仕組みである。このようにして物資や人車を運ぶわけだが、2006年に世界遺産に認定され今も現役で稼働している。

アリータ駅を降りて川べりまで歩く。この橋に上るか否か思案しながらスーパーマー

ケットに立寄り水や果物を調達していたら、ホテルで朝食の折ご一緒した熟年女性二人(北海道から来たという)にバッタリ出会う。彼女たちはビスカヤ橋上を往復してきたと言う。二度と来れないと思ひ度胸を決めて渡ったそうだ。これを聞いて私達の逡巡は吹っ飛んだ。高さ 50m、川幅 160m、橋上の歩道桁幅は二人並んで歩いても余裕があり、金属性網目の上を板張りにしてあった。ただし両側は吹き曝しのまま、簡易柵があるだけで見晴らしは最高、眼下を船が往来、周囲を山で囲まれた港湾都市ビルバオの繁栄が蘇ってくるような景観である。微風を感じながら一時のスリルを楽しむ。上り下りのエレベータを運転する係員に聞いたら風速 7mの風が吹けば登楼は不可となる由。来て見て上って好かったと旅冥利に浸る。



ビスカヤに来て見て上る遺産橋

恐ろしや街路樹倒す暴風雨

蜘蛛のオブジェ(グッゲンハイム美術館)

至福なりバスクの美味に舌鼓

セバスチャン美食求めてバル巡り

ピンチョの居酒屋と言えばサンセバスチャンの方が本場かもしれない。旧市街の飲み屋横丁には興味あるバルが軒を連ねる。ホテルで幾つかお薦めをノミネートして貰い、物色に出掛ける。同じように涉獵する観光客がぞろぞろ、でも時間が早い所為か営業中の店は少ない。そんな中、たまたま客で混雑している店に入り二人用の席を特別に拵えて貰う。普通はカウンターでワインを飲みながら席の空くのを待つところだ。他客の食らいつくのを参考にメニューを決め、大きな茹でタコと白身魚のコロッケ等を発注する。これが当たりの舌鼓、たまたま店名も「アタリ」、ホテルでの推薦順位は第 4 位の店であった。

店内を見渡すと日本人客もちらほら、ブリュッセルからやって来た子連れファミリーや、出身地不明の熟女 6 人衆など。後者のグループは軽く飲食、雰囲気だけ味わって早々に引き上げる。この連中、翌日の私たちの移動先であるバイヨンヌ(仏)でも見かける。老舗チョコレート屋でお土産買いに夢中だった。今を時めく典型的な有閑ババァ集団であろう。サンセバスチャンのホテルでは、他にブダペストからやって来た日本人の若い家族連れが二組もいた。恐らく海外駐在の人たちで新天皇即位による休暇を利用しての外遊だと思われる。

旅行けば晴れの日もありや雨の日も

Traveling broadly has, not only quite a fine day, but cats and dogs' one.

今回の旅行は前 4 分の 3 が曇りないし雨、後 4 分の 1 は晴ないし曇りで、全体として雨の影響を強く受けた。特にサンセバスチャン滞在時には、とんでもない暴風雨に見舞われる。街路樹が根こそぎ倒れ、大西洋の荒波が容赦なく打ち寄せ、砕け散る白波はウルメア川を遡上する。モタ城への道はすべて封鎖され外海岸へは近づくことができない。どこにも行けなくなった観光客はコンチャ湾内を散歩して旧市街へと足を運ぶ。中には立入り禁止テープをくぐり抜け少しでも怒涛に近づいて、この稀有な波しぶきの記念写真を撮ろうと挑む。当日朝私たちは外出を試みるも、傘が差せないほどの強風と激しい雨に一步も進めず、結局、半日ホテルにしけ込んで天候の回復を待つことにした。当初

サンセバスチャンは1泊2日で通過の予定だったのを2泊に変えた。土日にかけてホテル代も高く、できたら1泊に止めたかった。しかし、このホテルは1階ロビーには飲み放題の飲料とスナック類があり、時間の制約はあるが部屋への持ち込みも可、さらに室内小型冷蔵庫の飲食物も全て無料であった。これらのお陰で心置きなく嵐が過ぎ去るのを待つことができた。結果はオーライ、かくして午後には風雨も収まり市内散策に出掛けた次第である。

スペイン TV 放送の 24 時間ニュース番組を観ていたら、この季節外れの嵐による被害はあちこちで発生、特に地中海沿岸寄りではヤシの樹が多数倒れ、交通事故や死者まで出たと報道されていた。つい一か月半前の千葉県を襲った台風被害を思い出す。わが家から 500m 離れたスギ林でも同じように多くの倒木が見られた。サンセバスチャンの被害は比較的軽微だったらしく我が旅の続行に支障はない。不幸中の幸いである。第 2 句は英語俳柳。

雨の中パスポートチェックで国跨ぐ

ビアリッツに何しに来たか じーせぶん ら G 7 等

サンセバスチャンからバイヨンヌへはバスで行く。鉄道を使う手もあるが、これが簡単で時間も早い。山中を貫くハイウエーを降りて所々途中の街に立寄る。高速道路沿いには牧場、工場や倉庫、そして瀟洒な別荘風の館もあり、バス地方の活気が伝わってくる。大型バスの運ちゃんには道に無案内と見えて、街区に入ると女車掌の指示に従って運転する。二人とも熟年の老々コンビ、車掌は風邪を引いているらしく咳が止まらない。見かねて「のど飴」を取り出し彼女に渡す。「メルシー」、二人の会話も仏語、フランス系バス会社の運行である。こんな運転手と車掌で大丈夫かなと思っているうちに、フレンチバスクの領分に入る、ここで厳めしく銃も携えたポリスのパスポートチェックを受ける。相変わらずそば降る雨の中、しっとりとしたスズカケ街道を走り、いかにもフランスらしい可愛い家並みのサンジャン・ド・リュズを過ぎてビアリッツ空港に着く。ここまで来ればバイヨンヌはもう近い。

ビアリッツの飛行場からそう遠くない海辺には、2 か月ほど前に世界 7 か国首脳が集まり会議を開いた由緒あるホテルがある。ナポレオン 3 世妃ウージェニーの別荘だった所だ。辺りは 19C 以来の王侯貴族の保養地で、今でも大西洋岸屈指の高級リゾート地である。ここで世界首脳は何を語ったのであろうか。「会して議し、議して決し、決して行い、行ってその責めを負う」、これが会議の鉄則である。トランプ氏や安倍首相、その他皆々ご夫人同伴で会合を持ったはずである。しかし世界はますます混迷を深めるだけで何一つ解決していない。皆さんは高級ワインで乾杯、フランス料理を頂いて和やかにお友達同士談笑されただけだ。ホスト役のマクロン君はこの円満会食に全力を注ぎ、フランス国内に幾多の問題を抱えながらも悲しきピエロを演じたわけである。そんな雑念に耽っていたらアドゥール川沿いの停留所にバスが着いた。何も無い川べり道を傘差しながらホテルまで黙々と歩く。川面を伝わり寒風が吹き付ける。さらに雨脚が強くなったようだ。(続く)

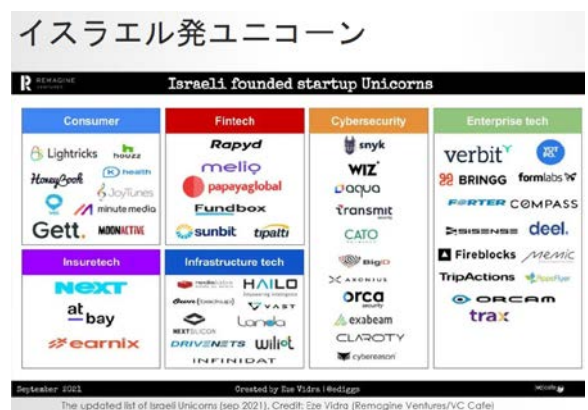
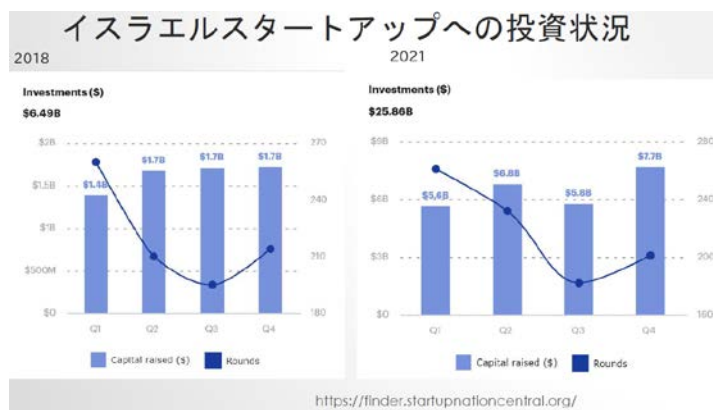
ウェブサロンの話、あれこれ

第 12 回 ICT 海外情報ウェブ講演会(サロン)模様

事務局

第 12 回 ICT 海外情報ウェブ講演会(サロン)が 2022 年 2 月 26 日(土)19 時 30 分～21 時、ウェブにおいて開催された。講師は、西村誠司様(元 NTT、元ノーザンテレコム)、演題は『スタートアップ国家イスラエル～多くのスタートアップと起業家を生む源泉』であった。主な話題を以下に示す。

- ・イスラエルは 1948 年建国され、人口約 923 万人、ユダヤ人(約 74%)、アラブ人(約 21%)、170 か国以上から移民を受け入れ、25 歳以下の人口 42%という国である。兵役が男子 3 年、女子 19～24 ヶ月ある(アラブ人除く)。一人あたり GDP は 2021 年 43,688 ドル、経済成長率 3.5%であった。
- ・ユダヤ人とはユダヤ教を信じる人のことであり、世界で 1,400 万人、うちイスラエルに 634 万人、米国 570 万人、フランス 46 万人、カナダ 39 万人いる。戒律により、超正統派、正統派、保守派、改革派、世俗派などに分かれている。安息日は金曜日の日没から土曜日の日没までであり、日曜日は働く。
- ・2004 年、イスラエル系スタートアップ企業パッサベ社(GE-PON チップベンダー)日本法人立上げに参画したが、同社は 2006 年、NASDAQ 上場企業 PMC-Sierra 社に \$300M で買収統合された。その際、日本法人社長を任され、2015 年まで務めた。
- ・2016 年に通訳案内士を取得、最初のガイドは豪華客船による桜島観光であった。
- ・イスラエルのスタートアップへの投資額は 2018 年 6.49B ドルであったが、2021 年には 25.86B ドルに急増した。企業の IT インフラ、セキュリティ、フィンテックなどが多く、またアグリテックも伸びている。



- ・日本企業も、クボタがドローンによる果樹収穫でイスラエル企業に出資、オリンパスが泌尿器向け治療機器メーカーを買収した。NTT が 2021 年 5 月、イスラエル現地法人を設立した。同社 CEO は元在日イスラエル大使館経済公使であり、顔見知りの方である。日本のイスラエル企業への投資額は 2021 年、29 億 4,500 万ドル(約 3,400 億円)であった。
- ・インテルはモバイルアイ社を 15.3B ドルで M&A し、グーグルはウェイズ社、また三菱田辺製薬が NeuroDerm 社を買収するなど、活発な動きがある。また、ユニコーンもイスラエルで多数生まれているが、日本では 2020 年のユニコーン企業が Preferred Networks など 7 社だけであった。

- ・イスラエルの最近の出来事として、2021年1月世界最速のワクチン接種開始、5月ハマスからのロケット弾4,500発と1,000回以上の空爆反撃、6月12年ぶりの政権交代(アラブ政党の初参加)、2022年1月UAEとのアブラハム合意などがある。

エルサレム

エルサレム旧市街



ダマスカス門、ヘロア門、ライオン門、黄金門、神殿の丘、聖墳墓教会、聖母マリア教会、キリスト教徒地区、イスラム教徒地区、ユダヤ教徒地区、アルメニア人地区、シオン門、新門、ヤッファ門





2021年5月紛争 (ロケット弾とアイアンドーム)

- ・ 5月10日: ハマスガザ地区よりエルサレムにロケット弾6発発射
- ・ ハマス: ロケット弾約4500発
イスラエル: 空爆約1000カ所
- ・ 5月21日: エジプトの仲介により休戦
- ・ 犠牲者数
ハマス側: 死者約250人 負傷者約2000人
イスラエル側: 死者13人
- ・ アイアンドーム
イスラエル国防軍 (IDF) タルピオットメンバー開発の防空システム AIにより落下地点を予測し市街地に到達可能性のあるロケット弾を迎撃 実戦の命中率は90%



- ・イスラエル国防軍(IDF)には、タルピオットというエリート養成プログラムがある。毎年、高校生約1万人から50名を選抜し、最初の3年間はヘブライ大学で物理、数学、コンピュータサイエンスの学位取得、その後6年間はIDFで技術開発に従事する。卒業生はアカデミックに一部行くが、多数は産業界に行き、スタートアップの原動力となっている。出る杭を伸ばす戦略である。
- ・スタートアップした起業家達は多数のスタートアップに関わったり、エグジットやIPOを目指している。
- ・起業家DNAとして、①自分がボスでありたい、②個人や違いを重視、③間違ふことは恥ではない、間違いを正すことから学ぶ、④失敗に寛容(挽回可能)、⑤形式にとらわれない、上司を批判することも許される、⑥建前でなく本音、⑦臨機応変、がある。
- ・1993年、政府が100Mドルのファンド10件のベンチャーキャピタル(VC)基金ヨズマプログラムを創設した。民間のVCがスタートアップ企業に60%の資金を出せば、政府が残りの40%の資金を出し、投資が成功した場合、民間VCは政府出資分を5年後に安く買い取り可能である。多くの海外VCが活用し、10年間で240件以上のVC基金が誕生するなど、イスラエル国内のVC産業の成長に貢献した。日本のVC支援は周回遅れの感がある。
- ・まとめとして、スタートアップ国家イスラエルの源泉は、①国家存続が国是、②多様な考え方がイノベーションを生む、③出る杭を伸ばす、④失敗を恐れず、失敗を許す社会、⑤ゼロから1を生む、⑦デジタル国家(国家セキュリティ確保から新たな経済成長エンジン)、⑧IDF(兵役)とタルピオット、R&D、8200(サイバー)部隊、予備役ネットワーク、⑨ヨズマ、弱者の起業支援、⑩ユダヤネットワーク、である。

講演後、イスラエルが金融やセキュリティで強い理由、ユダヤ人の性格、国家の次期戦略、ユダヤ財閥の支援、通信事情、ITUでのサポートなど、多数の質問・意見があった。特に、ミサイル防御など日々危険にさらされ、常に実戦しながらの技術開発・応用が行われており、日本の現状との大きな差異を印象づけられるものであった。



<事務局注> 講演資料は、講師のご厚意により、下記サイトからダウンロードすることができます。

<https://ictov.jimdo.com/home/海外情報談話会/>

編集後記(編集者から一言)

皆様のご協力をいただき、おかげさまで会報第102号を発行することができました。今回は当会の長江顧問(NTT東日本国際室長)から「NTT東日本の国際室活動」の特別寄稿をいただくとともに、岩槻日記、海外グラフィティ、スペインバスク地方・フランス西南部俳柳紀行のご寄稿を継続いただき、誠にありがとうございます。

これまでのご協力に改めて心より感謝するとともに、当会及び当会報へのご感想、ご意見などございましたら、下記サイトにご記入いただければ幸いです。皆様からのさらなる会報へのご寄稿とICT海外情報ウェブサロンへのご参加をお願いするとともに、今後とも当会へのご指導・ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

<https://ictov.jimdo.com/コメント/>

発行： ICT 海外ボランティア会(ICTOV)
会報担当： 空席のため募集中 (編集長兼広報部長)、山川 博久(事務局長)
ホームページ担当： 山崎 義行(報道部長)、安達 信男(幹事)